

# カントの第一の二律背反について

美 濃 正

## 1.

カントの第一の二律背反は、周知のように、世界(注1)は時間的、或いは空間的に有限であるか無限であるかという問題を扱っている。カントは、この二律背反の提示と解決を通して「現象の超越論的観念性」の独立の証明が与えられると主張している。(B 534。以下同様に『純粹理性批判』からの引用は第二版の頁附のみを示すことにする。)小論は、この主張の当否を関心の焦点としつつ、この二律背反に関するカントの諸議論を検討していこうとするものである。結論として我々は次の二点を示したい。1)カントの議論が示し得たことは、時間的・空間的な「すべての現象の総括」(ibid.)としての「世界」なる概念はいかなる指示対象ももたないということである。2)しかし、この議論はカントの意図に反して、時間的・空間的現象(中立的な意味で)の存在論的性格(「物自体」か「現象」かという)に関わりをもたない。以上の二点である。

## 2. 1

まず、この二律背反の定立 Thesis の「証明」(B 454-6)の議論の内容を見てゆこう。それは次のように要約される。

時間に関して。世界は時間的に始まりをもたないと仮定する。このことは現象の無限の時間的系列が現在迄に過ぎ去ったことを意味する。しかし「系列の無限性とは、その系列が継時的総合によっては決して完結され得ないということである。」(B 454)従って現象の無限の時間的系列が現在迄に過ぎ去ったということは不可能である。故に世界は時間に関して始めをもつ。(有限である。)

空間に関して。やはり世界は空間的限界をもたないと仮定する。ところで「各直観の或る限界の中に与えられないような量」の「全体(性) Totalität」は、各部分の「完結された総合」によって考える他はない。(B 454-6)従って世界の無限の空間的諸部分の継時的総合は完結したもののみなされることになる。いいかえれば、このような総合の無限の時間系列が過ぎ去ったということになる。これは時間に関する議論の示す所により不可能である。故に世界は空間的限界をもたない。(空間的に有限である。)(注2)

## 2. 2

以上のような定立の「証明」における時間に関する議論について、ラッセルは次のような批評を加えている。

「根深い主観主義的な精神的傾向に禍いされて、カントは背進的综合を前進的生起の代りに置きかえることによって系列の意味を逆転したことに気づかず、終りをもたない心的系列を終りはもつが始まりのない物理的系列と同一視することが必然的であると考えた。」(注3)

ラッセルの批評が当を得ているとすれば、カントの議論はみえすいた詭弁ということになるであろう。即ち、カントが前進的な物理的事象の系列とこの系列を背進的に把握していく心的活動の系列とを同一視する誤りを犯しているのであるとすれば、trivialに世界は時間に関して有限でなければならないことになるであろう。なぜなら、後者の心的系列は、無限であるとすれば終りをもたないだろうが、人間の心的な活動の系列である以上始まりはもたねばならない。しかし、それと同一視される物理的系列は現在で終止するものであるから、それは終りをもたないわけにはいかない。それ故、この心的系列、従ってまた物理的事象そのものの時間系列も、(始めと終りをもつものだから)有限でなければならないことになるからである。私には、カントがこのような明白な誤りを犯しているとは解されない。

## 2. 3 (注4)

むしろ、定立の「証明」におけるカントの議論は、無限の概念についての、彼の数理哲学的考察に基いているものと解される。「定立への注」において彼は次のように述べている。

「真の(超越論的な)無限の概念は、或る量 Quantum の測定における単位の<sup>〇</sup>継時的<sup>〇</sup>総合が決して<sup>〇</sup>完結され<sup>〇</sup>得ない<sup>〇</sup>ということである。」(B 460)

「これ〔上の引用文中の Quantum を指す〕はこのことによって、<sup>〇</sup>あらゆる<sup>〇</sup>数<sup>〇</sup>よりも<sup>〇</sup>大である<sup>〇</sup>ような(与えられた単位の)多 Menge を含む、これが無限の数学的概念である。」(ibid. Anm.。以下、地の文、引用文を問わず。点は著者による強調を、引用文中の・点は原文のゲシュペルトを示す。)

以上の引用文から次のことが確認できるであろう。1) 現象の時間的、或いは空間的な量 Quantum (これは「直観の公理」に従って「外延量」即ち離散量をなす(vgl. B202))はすべて或る与えられた単位の多 Menge を含む。この量を与えられた単位量の集合とみなし得るならば、多とはこの集合の濃度、或いは(広義の)個数 Anzahl と言ってもよい。2) しかし、現象のあらゆる量に対して、それが含む(与えられた)単位の「数」を常に指定できるわけではない。これはまさに無限量の場合に生じる。それが含む与えられた単位の多は「あらゆる数を越えている」から。或る現象の量を含む単位の「数」を指定し得るのは、その各部分の「継時的総合」、即ち単位の枚数が「完結され得る」場合、つまりこの量が有限である場合に限られる。(無論、カントは無限量を否定している。)(注5)

## 2. 4

以上に示した「多」と「数」の両概念の区別を念頭におくならば、次のカントの主張(の後半)は納得できるものとなる。

「しかし、何かか離散量として考えられるや否や、その中に含まれる単位の多は<sup>〇</sup>一定である<sup>〇</sup>ことになる。従ってまた、常に或る数に等しくなる。」(B 555)

カントは、ここで或る量が「一定である bestimmt」とは、その量の含む単位の多が或る(有限)数に対応すること、即ち「<sup>〇</sup>どれほどの<sup>〇</sup>大きさか<sup>〇</sup> wie groß es sei」(B 458)という問いに対する答えがその量に関して与えられ得ることであることを明らかにしていると言える。このような量は、広い意味での量 Quantum とは区別されて、カントによって「一定量 Größe」と呼ば

れているように解される。(注6) たとえば次の引用文はそれを示唆している。

「… 無限は、単にこの与えられた単位に対する関係に存するのであるから、常に同一のままに止まるであろう、尤もこれによって全体 *Ganzes* の絶対量 *absolute Größe* は決して認識されないことは明らかであろう。」(B 460)

以上の点を踏まえてカントは次の結論を導き出すのである。

「これに対し、無限に分節された有機体においては、まさにこの〔無限に分節された有機体という〕概念によって全体は既に分割されたものとして表象されている、そして諸部分のそれ自体において一定の、しかし無限の多が、あらゆる分割の背進に先立ってこの有機体の中に見出されることになろう。しかしこれによって人は自己矛盾に陥るのである。」(B 554-5)

「一定の多」とは(有限)数に他ならなかった。従って或る一定量 *Größe* (離散量としての)が無限であることは不可能である。なぜなら一定量とは、それが含む単位の多に或る特定の(有限)数が帰され得るような量であり、そして無限とはあらゆる(有限)数を越えていることであつたから。換言すれば、無限の量 *Quantum* とも言えるが、無限の一定量 *Größe* とは矛盾を犯さずには言えないのである。カントの「無限」の概念を中心として見た、数と量についての考え方は、以上のようにまとめられるものと考えられる。(注7)

## 2. 5

そうすると定立の「証明」におけるカントの議論は、無限の一定量(所謂現実無限)というものは一般に不可能であるが故に、時間的、或いは空間的に無限の大きさをもつ世界は存在し得ないというものであることになる。しかし、なぜ無限な世界は、無限な一定量をなす世界と考えられなければならないのであろうか。なぜ「世界は、カントの定義した意味で、即ち可能的に無限(注8)である」と言い得ないのであろうか。ベネットはこの点を衝いて、次のような解釈を行なっているようである。即ち第一の二律背反におけるカントの通常立場は有限量を越える非完結量(即ち可能的に無限な量)は無限ではないという立場である。しかし、この立場からは、「世界は可能的に無限である」という帰結が不可避であり、カントの言葉の端々にそれが現われている。(J. Bennett, op. cit. p. 133 及び pp. 137-142.)

しかし、これはたとえば次のようなカントの主張の中心的論点を見逃した解釈であると考えられる。

「このような〔部分の継時的〕総合は決して完結させられない系列をなさねばならないであろうから、この系列に先立って、従ってまたこの系列によって全体性を考えることはできない。」

(B 460)

問題は「全体性」の概念にある。前節(特に(注6))で我々は、この概念が「一定量」の概念と結びついていることを確認した。それは数が全体性の概念に属するとされている点に基いていた。(vgl. B 111) 勿論、第一の二律背反に関して用いられる場合、「全体性」は「全体 *Ganzes*」とほぼ同じ意味で用いられることが多いであろう。しかし、カテゴリーとしての「全体性」(それは「単一性とみなされた数多性である」と言われる(B 111))という意味を二重写

しにして、カントがこの語を用いていると解することは極く自然である。さて他方、カテゴリーは或るものを可能的経験の対象たらしめる「構成的原理」（純粹理性の「統整的原理」と區別される意味で）である、或いはこのような原理の基礎をなすものである。いかえればカテゴリーの適用可能性は或るものが経験の対象であり得るか否かの判定基準をなすと言ってもよからう。従ってまた「全体性」の概念は、上のような意味で「一定量」の概念とだけでなく「対象性」の概念とも結びついていると言えるのである。

即ち、上の B 460 の引用文におけるカントの論点は、「非完結的量をなす対象は可能的に無限である」ということではなく、むしろ「そのような量は、全体性を欠くが故に一個の対象とはみなされ得ない」ということであると解されるのである。実際、非完結的な（可能的に無限な）量には「どれほどの大きさか」という問いの答となる明確な述語を述定し得ない。それ故に、それはまた、何か時間が及び空間における対象であるための決定的な徴表を欠くことになるのである。

こうして定立の「証明」におけるカントの議論は次のような趣旨のものと解せられる。無限な世界とは無限な時間的・空間的対象を意味するが故に、それは全体性をなす現実無限でなければならず、単に可能的に無限な量ではあり得ない。然るに現実無限は一般に不可能であるから（世界なる対象があるとすれば）それは有限な対象でなければならない。(注9)

このように、カントによる世界の無限性の反駁は、同時に世界の対象性の否定と結びつき、むしろそれをこそ狙いとするものではないかと考えられる。そこから更に、この「世界は真正の対象ではない」という直観こそ、第一の二律背反におけるカントの議論全体の出发点をなすものではないかという推測がなされ得よう。いかえれば、世界は対象であるという考えが二律背反の生じる源だということである。我々は、この点を反定立を検討する際に再び考えなければならぬであろう。

### 3. 1

次に反定立 *Antithesis* の「証明」（B 455-7）における議論の検討に移りたい。その概要は次の如くである。

時間に関して。世界が始まりを有すると仮定する。従って世界は空虚な時間によって先行されていることになる。しかし、空虚な時間は一様であってそのどの部分も他の部分にまさって「現実存在の条件 *Bedingung des Daseins*」（B 455）(注10) を含んでいるとは言えないから、空虚な時間の或る特定の時点において何かが生起 *Entstehen* するということは不可能である。故に世界は始まりをもたない（時間的に無限である）。

空間に関して。世界が空間的に限界づけられていると仮定する。従って世界は無限の空虚な空間によって囲まれていることになる。そうするとこの空虚な空間に対する世界の関係が考えられねばならない。しかし、世界は現象の「絶対的全体」（B 455）であるから、その外には世界の関係すべきいかなる「相関者 *Korrelatum*」（B 457）も見出され得ない。従って世界の空虚な空間に対する関係もまたあり得ない。これは矛盾であり、故に世界は空間に関して限界をもたな

い（無限である）。

### 3. 2

反定立の「証明」が含む議論は、諸家（注11）が指摘するとうり、所謂ライプニッツ-クラークの論争における前者の議論との強い類似性を示している。我々は、まずこの節（時間に関して）と次節（空間に関して）でこの点を検討、確認したい。しかし、カントの議論は、ライプニッツのその単なる再現ではあり得ず、同様の論拠を用いながらも問題とされる論点は微妙にずれているのではないかと考えられる。この点は、3. 4節で取り扱うことにする。

世界の時間的有限性に反対するカントの議論と次のライプニッツの議論との類似性は明らかであろう。（ライプニッツは同時に空間に関してもこの議論を適用しているが。）

「そしてそれ故に、人は……神はどこであれ気に入った特定の空間、いつであれ気に入った特定の時点に事物を創造なさったと言ってはならない。というのは、すべての時点、すべての空間はそれ自身では完全に一様で互に識別できないものであるから、それらのうちの一つが他よりも望ましいということとはあり得ないからである。」（注12）

ライプニッツは「すべての時点は互に識別できない」と言うが、これは文字通りに受け取るべきではないだろう。単に、事物が「現実存在するための条件」（B 455）という点から見ればどの時点も同等だという意味であろう。（注13）そこから彼は「……事物の系列が同じものであるときに、これらの事物がなぜその瞬間におかれ他の瞬間におかれぬかの理由が存在することは不可能である」（Leibniz's 3rd Paper 6, Alexander ed. pp. 26-7）と推論する。何れの瞬間に始まった事物の系列も、上の前提のもとでは等しく実在的、或いは善であり扱ふ所がないからである。

相似た仕方で、カントはこのような空虚な（絶対）時間における事物の生成という状況を考える。そしてライプニッツと同じ論拠で、このような状況においては、恰もピュリダンのロバの如くに事物はどの時点からも存在し始めることができないうと推論していると言える。しかし事物の系列は現に存在する以上、空虚な（絶対）時間という仮定、従ってまたその前提である世界の時間的有限性の仮定が否定されるべきことが導かれるのである。（注14）

### 3. 3

反定立の「証明」の空間に関する部分は、しかしながら、厳密にはライプニッツ的でない要素を含んでいるように見える。そこでのカントの議論は、3.1節に示したように、世界の外なる空虚な空間中には世界が関係すべきいかなる「相関者」も存在し得ないという主張に集約される。我々は、まずこの主張の意味を理解することに努めよう。

カントの議論の出発点は、B 457の脚注において明らかにされているように、「空間は単に外的直観の形式……であり、外的に直観され得る現実の対象ではない」という彼独特の空間論である。そして、これは言い換えれば、世界の外なる空間は世界に対して「総合における相関者」たり得ないということだとカントは言う。これはどういう意味なのであろうか。

カントは、この脚注（B 457）で「合成」という関係に言及している。合成という関係は、関

係させられる二つの項にとって偶然的である。二つの項は他の仕方でも関係することも可能なのである。それが可能なのは、結局、二つの項が存在論的な概念の枠組の中で同等の身分をもっているからだと言えよう。こうして、これらの項の合成関係を主張する命題は、有意義に真理値を付与され得るのである。カントはこのような関係こそ真正の関係であると考えたのではなからうか。しかし、現象と空間、従ってまた世界とその外の空間とはこのような真正の関係に立っているとは言えない。なぜならカントの考えでは、両者は質料と形式として以外の仕方でも関係し合うことはできないからである。従って世界の外の空間に対する世界の関係は「外的直観の空虚な規定」にすぎないことになる。カントの考えは以上のように理解されるのではなからうか。(注15)

このように、反定立の「証明」の空間に関する議論は、「空間は外的直観の形式」というカント独自の主張に基いている点で、確かにライプニッツ的ではない。因みに先廻りして言うならば、この議論は、第一の二律背反の提示を通して現象の超越論的観念性を証明するというカントの意図からすれば、明白に循環を生じさせ、好ましい議論とは言えないであろう。この意味においても、世界の空間的有限性に反対する上のカントの議論は問題があるように見えるのである。

しかしながら、これらの問題点があるにも拘わらず、私には、上のカントの議論は基本的にライプニッツの立場からするものであることは間違いのないことと考えられる。そして、この点を見失わぬかぎり、超越論的観念論を証明する上での循環という難点を避ける道が見出され得ると思われるのである。

カントが反定立の「証明」の空間に関する部分で論駁しようとした「世界の外なる空虚な空間」(B 461)という「不合理物 *Unding*」( *ibid.*, vgl. B 56) とは、何であろうか。カントは何を念頭において論駁を行なったのであろうか。B 457 の脚注で明らかにその語が用いられているように、ニュートン的な意味での「絶対空間」以外にはあり得ないと考えられる。このことは、テキストの他の箇所からも確かめられる。二律背反の解決法を論じる箇所 (B 549) の脚注でカントは次のような示唆を与えている。

「そこ〔即ち反定立の「証明」〕では我々は……もし感性界がすべての時間と空間を占めていないとすれば、それは一般に時間と空間において一定の位置をもつとは認められないとした。」世界(感性界)全体が空間において占める「一定の位置」とは、まさに反定立の「証明」において否定される空虚な「空間に対する物の関係」(B 455)の一例に他ならないと解される。(注16)物の「絶対的全体」( *ibid.*)に対してこのような(真正の)関係に立つ空間は、まさにあらゆる事物を包含し、かつそれらから独立に固有の座標系を備えているような空間、即ち所謂絶対空間でなければならないであろう。

こうしてカントは、ライプニッツ同様に、ニュートン的な意味での絶対空間説を否定しようとしていたのだと言えよう。そして、このことこそ、我々がここで確認すべき唯一の重要な点だと考えられる。言いかえれば、カントは、絶対空間説に反対すべき何らかの—— どのようなものであれ—— 理由を持っていたのである。この点から言えば、我々が反定立の「証明」そのものに見出した自己矛盾(循環)も、絶対空間説に反対する他の論拠を採用することによって(たとえば

3.2 節で検討した時間に関する議論を適用することによって)容易に解消され得るものと考えられるのである。即ち、この難点はカントの本来の論旨に関わるものとは考えられないのである。

### 3.4

しかし、カントの議論の内容は、いわばクラークとの論争におけるライプニッツの議論を踏襲しつつ、絶対時間・空間説を反駁するということに尽されているのであろうか。そうではあり得ない筈である。既に引用したB 549の脚注でも述べられているように、反定立の「証明」では「通常の独断論的な考え方に従っ」たが故に「その結論もことは異なった」のである。カントは既にこのような「異なった」結論を念頭にしつつ、二律背反の各々の証明を構成しているに違いない。そしてカントとライプニッツの差異は、まさに世界の有限性と無限性の問題が一つの二律背反を生み出すものであることを認めているか否かという点に存するであろう。換言すれば、カントは、反定立が含意する絶対時間・空間説をライプニッツに依拠して論駁しつつ、しかも更に、この説が定立(おそらくはライプニッツ自身の説とカントはみなしていたであろう。(注14)を参照。)と共通な或る誤った前提を含むことを意識していたに違いないのである。無論、この前提を剔り出し批判することこそカントの本来的な意図であったと言わねばならない。

さて、我々は既に定立の「証明」を検討した際に、この誤った前提とは何かについて、一つの推測を行なっておいた。それによれば、この前提は「世界は真正の対象である」という命題に表現されるのではないかと考えられたのであった。この推測は反定立の「証明」においても確かめられるであろうか。

反定立の「証明」の議論で奇異なことは、その仮定「世界は有限である」から、「世界は絶対時間、或いは絶対空間によって限定されている」という帰結が直ちに導かれていることである。この点は、諸家の批判が集中する(注17)と同時に、カントが「反定立への注」全体を費やして正当化しようとしている所でもある。なぜカントは一見論理的に独立に見える二命題(世界の有限性と絶対時間・空間説)の間に含意関係が成立することを執拗に主張するのであろうか。

我々はここで、上述の我々の推測(「世界は対象であるという前提こそ二律背反の根源とカントがみなしたものである」)を試してみたい。それによって、上のカントの奇異な推論の理由が少しでも明らかになるであろうか。

我々は次のように推測する。カントは、反定立の証明の仮定「世界は有限である」という主張は「世界が真正の時間・空間的な対象である」ことを前提、或いは含意しているとみなしていた。ここでは、定立の証明の場合とは異なり、対象性の基準として特定のカテゴリーへの明らかな言及はない。しかし、何かが時間・空間的な対象であるための基準として、それが時間及び空間において一定の位置と括弧を占め、或いはそこにおいて運動や静止をなす等の規定をもつことを考えるのは自然であろう。『自然の形而上学的基礎づけ』の「運動学」の冒頭におけるカントの物質の定義「物質とは空間において運動するものである」は今の場合、極めて示唆的である。(注18)

カントがこのように考えていたとすれば、世界の有限性の仮定から、絶対時間・空間説は、次

のようにして導出されるように見えたのは無理のないことである。即ち、世界は一個の対象として、特定の時間-空間的規定をもたねばならぬが、この規定は、世界とはまさに現象の総括であるが故に、他の対象との関係を通して定められるわけにはいかない、それ故、世界には「空虚な時間が先行していなければならず、或いは、「世界は限界づけられない空虚な空間の中にあらねばならないであろう。

以上のように、反定立の証明の仮定をなす「世界は有限である」という命題が「世界は対象である」ことを前提しているということを明らかにすることによって、我々は少くとも前者から絶対時間・空間説への、カントの一見奇異な推論の跡をよりよく迎えるのではないと思われるのである。この限りで、前述の我々の推測は正当化されると言えよう。しかし、カントのこの推論が(注17)で言及した諸批判に耐え得るか否かは問題であることを付言しておく。(ここでは紙数の関係で論じないが。)以下の議論は、カントの考えが正しいと仮定して進めることにする。

#### 4. 1

さて以上に検討した所によって、我々が小論で示そうとする第一の点が明らかにされたと言えよう。即ち、第一の二律背反の議論によってカントが示し得たことは、「世界」の概念はいかなる指示対象ももち得ないということであった、と言えよう。なぜなら、我々の解し得た限りでは、カントは、「絶対的全体」としての世界、即ち真正の対象としての世界が存在するという考えを、二律背反を構成する両命題の共通の(誤った)前提とみなしているからである。

#### 4. 2

しかしながら、我々の解釈が唯一可能な解釈だというわけではない。カントのテキストは極めて含みの多いものなのである。我々の解釈を正当化してくれるようなカント自身の証言は見出せるのであろうか。そして、他の可能な解釈に比べて我々の解釈の方が正当である所以を明らかにし得るのであろうか。

まず、我々は第一の二律背反の構成が、世界の無限性を仮定すればその否定が、有限性を仮定すれば再びその否定が帰結するという形式をとっていると(当然のこととして)前提してきたと言える。が、既にこの点からして、他の論理構成を示唆する箇所がテキストの中にはない。(注19)にも拘わらず第一の二律背反の論理的な興味は、我々が理解した形以外の論理構成をそれがとっているのであれば、殆んど失われてしまうのではないかと考えられる。それ故、二律背反の論理構成という点に関しては、我々の解釈を変更する必要はやはり認め難いのである。

#### 4. 3

しかし、二律背反の論理構成については我々の解釈が正しいとしても、同じ構成のもとでパドクス(Paradox)の別様の解決法をとることは可能である。そして実際、J. E. レウエリンの指摘の通り(注20)カント自身がこの点について両義的な見解を示しているのである。まずレウエリンの指摘を見ることにしよう。

彼によれば、数学的二律背反は(みかけの)「分析的対当」(B 532)(即ち矛盾対当)の関係にある二命題が「弁証的対当」(ibid.)関係に立つにすぎないことが曝露されることによ

て解決されるというのがカントの考えであるが、この「弁証的対当」についてのカントの説明は、次のように両義的である。即ち『プロレゴメナ』(52節b)では、カントは弁証的対当の関係にある二命題の例として「四角な円はまるい」と「四角な円はまるくない」を挙げているのに対し、『純粹理性批判』(B 531)では、「すべての物体は芳香をもつ」と「すべての物体はよくない匂いをもつ」を挙げている。前者の場合にはカントは第一の二律背反を構成する二つの(みかけ上の)相互矛盾命題を共に「一定量をもつものとしての世界」という、「四角な円」の如き矛盾概念を前提するものと考えていると言える。他方、後者の場合には、彼は両命題が「矛盾に必要とされるより以上のことを主張している sagt」(B 532)、即ち「世界は一定量をもつ」ということを併せ主張しているとみなし、しかもこの主張は、匂いをもつという「物体の概念の偶然的制約」(B 531)の如くに偽なる偶然命題であるとみなす方向に傾いていると言える。レウエリンの指摘は以上のように要約される。(注21)

我々の解釈が、カントの第一の解釈(レウエリンの指摘した順序に従って)と一致することは明らかであろう。またこの解釈をとることは正当でもあると考えられる。なぜなら、第二の解釈をとるならば、「世界は一定量をもたない(つまり可能的に無限である)」という命題が偶然的に真とみなされることになる。しかし、カントの本来の考えは、「世界」の如き単なる理念を表わす語を主語とする「弁証的命題」(B 449)は「経験によって確証されるみこみもないが反駁されるおそれもない」(ibid.)というものであるから。つまりそれらの命題は決して事実命題たり得ず、単に「統整的原理」(B 537 etc.)としてのみ用いられるべきものである。

## 5. 1

さて、カントは第一の二律背反から最終的に次のような帰結を引き出している。

「証明は次のディレンマに存するであろう。即ち、もし世界がそれ自体で存在する全体であるならば、それは有限であるか無限であるかの何れかである。ところで前者も後者も共に(前者は上述の反定立の、後者は定立の証明に従って)偽である。従って世界(すべての現象の総括)がそれ自体で存在する全体であるということもまた偽である。このことから現象はそもそも我々の表象の外では無であるということが帰結する。しかし、これは我々がまさに現象の超越論的観念性ということによって言わんとしたことである。」(B 534)

即ち、カントは、第一に世界がそれ自体として存在し得ない、即ち物自体であり得ないこと、第二にそこから時間・空間的現象の超越論的観念性を帰結させようとしているのだと解される。これらの帰結の当否を最後に検討することにした。

## 5. 2

第一の帰結は、「超越論的実在論」をとれば、「有限」或いは「無限」な「世界」なるものが考えられねばならぬ、即ち現象の「絶対的全体」が「与えられていなければならぬ」ことになるという前提に基いて導かれていると言えよう。この前提は、他の箇所では次のように明らかにされている。

「次に、もし被制約者がその制約同様に物自体であるならば、前者が与えられるとき、制約への背進は課せられているばかりではなく、このことによって制約は既に同時に与えられている。そして、このことは系列のすべての項についてあてはまるから、制約の完全な系列が、従ってまたそれによって無制約者が同時に与えられていることになる……」（B 526）

この前提は正当であろうか。確かに次のことは言えるであろう。即ち、一つの被制約者が与えられれば、それをそのようにあらしめている制約の各々がすべて「与えられて」いる、つまり存在し、或いは存在したものとみなされる、とは。しかし、なぜ、そこから、このような制約の「完全な系列」もまた与えられていなければならないことになるのであろうか。カントがここで「制約の完全な系列」という表現によって、その「完結された系列」、即ち「全体性」をなし、一個の対象として正当に指示され得る、集合的統一をもった制約の系列を意味していることは明らかである。実在論をとった場合に、なぜ分配的な意味での「全体」から集合的な意味での「全体」への移行が必然化するのか、カントはその十分な根拠を示していると言いはれないのである。

しかしここで確認すべき更に重要なことは、第一の二律背反の議論は単に「世界＝現象の絶対的全体」という定義から出発したものであったということである。そして、この定義は、超越論的実在論という存在論的立場とは等値ではないということである。上のB 526の引用文が示すようなカントの議論が正しいと認めたとせよ、カントはその逆（即ち上の「世界」の定義から実在論が帰結されるということ）を決して証明してはいない。とすれば、我々はこの定義から出発し、第一の二律背反を提示することによって、いかなる存在論的立場に対しても中立的に、このように定義された「世界」が指示するような対象は存在し得ないことを明らかにしたことになるであろう。つまり、「世界」という対象は一般に存在し得ないが故に、それは況んや物自体としても存在し得ないというのが、第一の二律背反の真の帰結ではないかと考えられるのである。

### 5. 3

カントの第二の結論は、時間的・空間的な対象、或いは事象は、物自体か現象かの何れかであるという前提に基いて、第一の結論から導き出されていると考えられる。上に検討された所に従って、第一の二律背反の真の帰結からは、カントが導こうとした、この第二の結論は論理的に導かれえないことは明らかである。

しかし、なぜカントが、第一の二律背反の含む問題と実在論対観念論の問題とが平行的に取り扱われると考えたのか、その理由を考えてみることは、無意味ではない。その理由の一つは、観念論をとれば第一の二律背反を招く困難、即ち「現象の絶対的全体」の概念を容易に回避する道が見出されるように見えただけではないか、と推測される。次のカントの主張は、この推測を或る程度、裏付けているように思われる。

「これに反して、もし私が現象を問題とするならば、それらは単なる表象として、私がそれらの知識（というのは即ち現象自身、なぜなら現象は経験的知識に他ならないから）に到達しな

いならば全く与えられないものであるから、私は、もし被制約者が与えられるならば、それに対するすべての制約（現象としての）もまた与えられる、とは〔物自体の場合と〕同じ意味で主張することはできない。」（B 527）

カントの考えは、表象（＝現象）は、本来他の表象をかくあらしめる制約とはみなし得ない、それ故、或る表象が与えられても、それをそのようにあらしめている諸制約の全体について問うことはできない、或いはむしろ問う必要がない、とても要約し得るように思われる。ブロードの指摘するとうり「これはまさに観念は無力で非能動的であるというパークリの説である」（op. cit. pp. 226-7）と言える。

しかし、この考えはカントの超越論的観念論にとって好ましいものとは言えないであろう。なぜなら、彼の観念論は、カント自身強調するようにパークリのそれとは異なり、次のことを特徴とすべきであるからである。即ち、勿論可能的経験の枠組全体からは独立でないにせよ、個々の経験的知識、或いは知覚からは独立なものとして語り得るような現実的対象を、経験の内部において区別し出すこと。いいかえれば、まさに経験の対象についての言明は、単なるその表象についての言明（の集合）に還元し得ないということこそ、カントの観念論の重要な主張であると考えられるのである。（注22）こうして、超越論的観念論を証明するために、第一の二律背反に訴えることは、結局カントにとって可能なことでも望ましいことでもなかったと言わざるを得ないのである。

注1) 「世界」とはカントによれば「すべての現象の総括」（B 534 etc.）を意味するが、これはさしあたりは物理的対象、或いは事象の全体を意味するものと解してよいであろう。問題は、時間或いは空間そのものの大きさに関わるものでなく、現象の時間的或いは空間的な大きさである。この点の区別は明確にしておくべきである。（たとえば S. J. Al-Azm, *The Origins of Kant's Arguments in the Antinomies*, Oxford Clarendon Press, 1972 pp. 8 ff 等を参照。）カントは、時間或いは空間はその諸部分を「それ自身の中に含む」（B 40）ような「与えられた無限量」であると言う。しかし、この場合の「無限」の意味は、世界の無限性の場合とは異なるのである。この点については、三宅剛一『学の形成と自然的世界』第8章に詳しい。

注2) 上の要約が示すとうり、空間に関する議論は時間に関するそれに帰着させられている。実際、以下の検討で示される如く、カントの論点は二つの議論を通じて同じであると考えられる。それ故、以下では適宜、時間或いは空間に関する議論の何れか一つを取り上げて論じ、両者を平行的に取り扱うことはしない。

注3) B. Russell, *Our Knowledge of the External World*, George Allen & Unwin, London, 1952 P. 161

注4) この節に関しては J. Bennett, *Kant's Dialectic*, Cambridge Univ. Press 1974 pp. 132-7 及び M. S. Gram, *Kant's First Antinomy*, in

L. W. Beck ed., *Kant Studies Today*, Open Court, 1969 p.p. 220-4  
 に多くを負っている。但し、Gramのカント解釈にはやや不正確な点が認められる。

注5) 他にもB 111等を参照。また『可感界と可想界の形式と原理』第一節の脚注においては、この問題のより包括的で明瞭な取り扱いが見られる。(Ph. B. 版 S. 6) 無限数の否定についても同箇所を参照されたい。

注6) 更に *Größe* の概念と全体性 *Totalität* の概念との結びつきも明らかであろう。数は「全体性の概念に属する」(B 111) からである。(vgl. B 460 etc.)

注7) 以上の点を整理すれば、次のような表にまとめられる。

概念		量		濃度または個数	数
Totalität (Allheit)	Vielheit } Einheit }	Quantum	<i>Größe</i>	endliche Menge (Anzahl)	Zahl
			unendliches Quantum	unendliche Menge	

注8) 勿論、カントが可能無限とみなしていると考えられる (vgl. B 445) のは「全体が経験的直観に与えられている」量の分割における「無限への背進 *Regressus in infinitum*」の系列であり、これは「世界全体の無制約的量」(B 546) に関わる「不定への背進 *Regressus in indefinitum*」と鋭く区別されている。(vgl. B 538-543 etc.) しかし、たとえば次のようなカントの言葉が明らかに示すように、後者は単にどこで終止するのか分らない(有限であるかも知れない)系列 (vgl. e.g. B 541, 546 etc.) を生じさせるものではあり得ず、決して完結し得ない系列を生成するものと解すべきだと考えられる。

「私は背進をどこまでも続け得る。なぜならどの項も端的に無制約なものとして経験的に与えられておらず、従ってどこまでもより高次の項が可能とされ、同時にこのより高次の項の探究が必然的とされるのである。」(B 542, 他にも B 527, 549 etc. を参照。)

他方、詳しくは触れないが、物質の分割における背進が「無限への背進」だとするカントの論拠にも問題があると考えられる。総じて二つの「背進」の区別は無用ではないかというのが私見である。

注9) 定立の証明に関して、この証明は超越論的観念論を既に前提しており、第一の二律背反を通して「現象の超越論的観念性」が証明されるというカントの主張に循環を生じさせているという批判が、しばしばなされている。(cf. C. D. Broad, *Kant An Introduction*, Cambridge Univ. Press 1971 pp. 212-221, 或いは M. S. Gram, *op. cit.* pp. 218-9 etc.) これは基本的にラッセルと同様の立場からの批判と言えよう。確かに我々が示したカントのいわば直観主義的な数学観は、それ自体主観的作用である「総合」の概念に基いているものかもしれない。しかし、ブロードらの言うように知覚の主観的系列をそのまま現象の客観的系列と同一視するような主観主義的観念論を前提しているものとは解されないのである。

注10) 「現実存在の条件」とはカントの但し書きから明らかのように、原因のことではな

- い。それは以下に示すように所謂充足理由律と密接に関連する。従ってカントの議論は、世界は無原因には始まり得ないということ論拠とするものではない。
- 注11) たとえば S. J. Al-Azm, J. Bennett, C. D. Broad.
- 注12) Leibniz's 5th Paper 60, H. G. Alexander ed., The Leibniz-Clark Correspondence, Manchester Univ. Press, 1976 p. 77
- 注13) 各々の時点に対して強い意味で不可弁別者同一の原理を適用するならば、最初から議論の余地なく、絶対時間説を否定してかかることになるであろう。なぜなら、後者は、まさに時間はそれ自体で計量 metric を有するという限りで各自点が互に区別されるものであることを主張しているからである。(cf. G. G. Brittan Jr., Kant's Theory of Science, Princeton 1978, P. 98)
- 注14) 但し、ライブニッツは絶対時間説を否定しはするが、そこから世界の無始性を引き出すわけではない。(Leibniz's 5th Paper 74, Alexander ed., p. 80)
- 注15) 「相関者」の概念の解釈に関しては、J. Bennett, op. cit. pp. 157-8 に多くを負っている。
- 注16) 他の例は B 457 の脚注で言及されている「無限の空虚な空間における世界の運動、或いは静止」である。
- 注17) たとえば、C. D. Broad, op. cit. pp. 219-220, J. Bennett, op. cit. pp. 143-154, 或いは T. E. Wilkerson, Kant's Critique of Pure Reason, Clarendon Press Oxford 1976 pp. 120-1 等を参照されたい。彼らの批判の要旨は、所謂空間の関係説と有限世界とが両立し得るといふ点にある。これらの批判に対してカントは、或いは、「あらゆる場所は宇宙の中にのみある」(B 530) と答えるかもしれない。但し、これは「世界」の定義を変更してしまうことであろう。
- 注18) Metaphysische Anfangsgründe der Naturwissenschaft, Kants Werke in zwölf Bänden IX, S. 25, Suhrkamp Verlag 1957
- 注19) たとえば『プロレゴメナ』では次のような箇所がある。  
「理性が……その秘された弁証論を意志に反して明みに出す可能な唯一の場合には、それが一般に認められている或る原則に基いて一つの主張を立てると共に、他の等しく信じられている原則から、最大の正確さを有する推論法をもって、まさに正反対の主張を導き出す場合であろう。」 (§ 52 b. Ph. B版 S. 104)  
おそらくこれらの箇所に示唆を受けて、アルーアズムは、二律背反の本質は、「相互に排他的だが内的に整合的な」、そして「その間に理性的選択の手段のない」ような二つの形而上学的主張の争いを展開して見せている点にあると述べている。(S. J. Al-Azm, op. cit. p. 21 etc.) しかし、勿論、このような解釈のもとでは少くとも二律背反の論理的興味は消失するのである。
- 注20) J. E. Llewelyn, Dialectical and Analytical Opposites, Kant-Studien 1964 pp. 171-4
- 注21) 第一の二律背反の両命題の真理値の問題が残っている。カントは一貫してこれらを偽としている。勿論、これは経験的に偽という意味ではあり得ない。恒偽的、即ち矛盾命題であるという意味でしかあり得ないだろう。カントはこの点でラッセル的であるように見える。(cf. B. Russell, On Denoting, in Logic & Knowledge

George Allen & Unwin, London 1971, e. g. p. 46) レウェリンはこれに対し、「弁証的命題」は真理値を定め得ないという立場に立っているようである。この点については更にカントの認識論全体を検討した上で結論を出すべきであろう。

注22) cf. G.G. Brittan Jr., *op. cit.* chapter I

(みのただし 哲学科 博士課程 三回生)